

博士論文執筆経験談

平成20年3月修了生 高橋 愛

1. 初心を忘れず

私は、修士課程を終え、引き続き博士課程に進学した。そのきっかけは、友人の出産だった。それまで真剣に将来の仕事のことなど考えたことがなかったが、あの時これまでにないほど日本の子供たちを取巻く環境について考えた。

今の日本の現状を見たとき、何か恐ろしいものを感じ、仮にも修士まで教育のことを勉強してきた自分は何かをしなければならぬと切に思い、それを仕事につなげていくことにした。

博士課程に行った身内の者はなく、家族・親戚中に進学を猛反対されたが、親だけは説得し、固い決意、目標をもって、進学したため、様々な悩みに遭遇したとき、その初心は修了するまでの自分を支えるものとなった。

2. テーマは限定する

2年生の終わり頃にテーマ変更をした。最初のテーマでは、壮大なテーマで課程博士として論文を書き上げるのが難しかったためである。テーマ変更は、それまでの2年を白紙に戻すようなもので、さらに3年という修業年限をオーバーしてしまう可能性が高くなり、心理的に厳しい状況に追い込まれた。幸いにも私の場合は、偶然にも主テーマの他に副テーマを持っていた。そのため、基礎知識的なものやある程度の積み重ねがあり、テーマ変更では大きすぎる負担はなく可能であった。

課程博士の場合、修業年限がある。必ず論文提出をしようと思うのであれば、テーマは限定することをすすめる。

3. 休憩時間を設ける

3年生の時、3年では修了できないことが決定したとき、何とも言えない自分への敗北感と悔しさとの葛藤の日々が続いた。それは紀要や学会雑誌への投稿論文がリジェクトされた時の気持ち以上だった。

そこで、先ず初めにしたことは、生活態度の見直しである。夜は12時前には寝る、その日にできないことに対して無理はしない、休日は休んで好きなことをする、これを行った。働き詰め、勉強詰めは、思考を低下させ判断を鈍らせ、視界が狭くなると考えてのことだ。

博士課程では、つい孤独になりがちで、悩みを理解してくれる相手もなかなか見つかりにくい。博士課程にくるほどなので、人前では平常を装えるしたたかさはあるが、気持ちはほぼノイローゼ、という学生は実

際に多い。

私もどちらかという就打たれ強い方なので、それまでは気持ちの切り替えがうまくいっていたが、さすがにあの時ばかりはそうはいかなかった。入学時の初心に戻ることで保っていたモチベーションも効果はなかった。

人によっては、モチベーションの持ち方は様々であるが、ぜひ躓いたときは、博士課程入学当初の初心に戻るか、論文以外で好きなことをする休憩時間をとってみて欲しい。

4. 計画を立てる

計画性がない人は、計画を立て、表にし、それを必ずこなしていくようにする。期限がなければ、自由にきままに、のんびりタイプは、論文は提出できない。

私は、毎年、年度初めに「論文提出までの計画」を立て、約3ヶ月ごとにその見直しを行った。状況がうまくいっていても、まったく進んでいなくても行った。

計画を立てたら、必ず指導教員と副指導教員に報告し、定期的にそれまで自分は何を行ってきたのか、どういった方向で行くのかなどについても話すとうまい。

計画を立てることは、見通しを立てることであり、自分ができていること、これからやるべきことなど整理されるので、より論文を執筆しやすくなる。また、指導する教員に自分がやっていることを理解していただく機会にもなる。

論文を執筆して修了するには、どうしても指導教員の指導と信頼関係が必要になってくる。遠慮して何も言わない教員もいるので、学生も教員も両者ともに不安になるという事態を避けるためにも、ぜひ積極的に。

5. おわりに

私は1年オーバーし4年で修了したが、博士課程で過ごした時間は、自分との戦いの時間であったと思う。同時に、自分は何をしたいのかをじっくり見つめられる期間でもあった。博士論文は、学士や修士論文とは異なり、執筆して指導を受けてそれで終わりというものではない。常に、論文内容の意義を問われ、研究者としての第一歩に踏みこめるかどうか試される。それには、やはり自分自身が意義をしっかりと認識し、さらに他者に明確に伝えなければならない。

そのことに一番苦労したが、課程博士の博士論文執筆は、あくまでもスタートラインに立つものであり、それが最終目標ではないと考えると、乗り越えてみようという気力がわいた。そう考えてみてはどうだろうか。